



第3章 豊田市の森林の過去

わが国は豊富な森林資源に恵まれており、古くから私たちの生活に、森林や木材が深く関わってきました。一見同じ様に見える森林であっても、こうした人間との関わり合いや植生遷移によって、現在見られるような多様な森林が形成されてきました。

1 はげ山地帯

豊田市の北西端にあり花崗岩からなる猿投山周辺では、焼き物の原料となる良質な陶土や珪砂を含む陶土層が分布しています。江戸時代から明治時代にかけて、陶土の採掘とこれを焼く膨大な燃料用の薪材が伐採され続けた結果、広大なはげ山地帯となり、日本三大はげ山地帯の一つと呼ばれてきました。

森林法と砂防法が公布された1897年頃から、はげ山の復旧と森林の保全などの治山・砂防工事が、国や県によって積極的に実施された結果、今日見られる植生まで回復しました。



<明治時代後期のはげ山の分布>

資料：愛知の治山（1991年）

2 古くからの林業地帯

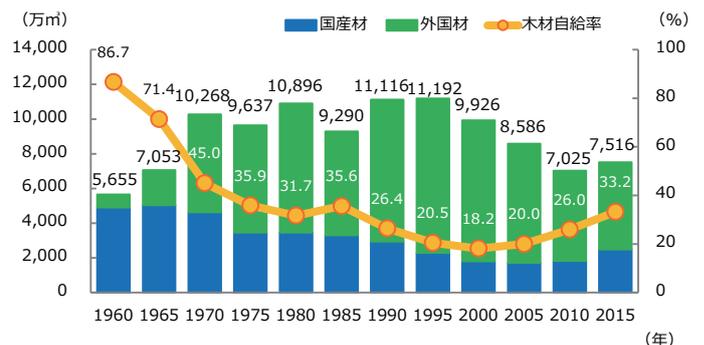
市の東部に当たる稲武地区や足助地区などには、古くから植林が行われてきた地域があります。現存する最も古い人工林は、約180年前の天保年間に植林されたもので、現在では、樹高35m、胸高直径1m超に達する見事なスギに成長しています。

3 拡大造林期（昭和30年代）

明治維新後の近代化から第二次世界大戦の終戦直後まで、乱伐により森林が荒廃したこの時代には、全国各地で土砂災害が続発しました。その後、国土保全と木材確保の両面から森林の保護と造林が叫ばれ、国策として成長が早く木材として使いやすいスギ・ヒノキ・カラマツを主とした拡大造林が全国で行われました。現在の人工林の多くは、戦後の拡大造林期に作られました。

4 管理されなくなった人工林

しかし、1964年の木材輸入の完全自由化、燃料革命、高度経済成長に伴う生活様式の変化などを背景に、国産材の需要が減少し、木材価格も大幅に低下しました。このため、財産としての森林の価値が下落し、放置される森林が増えました。ただし、近年では森林資源が利用期を迎え、また外国材輸入量の減少により、木材自給率もわずかながら増加傾向にあります。



<用材の木材需給（供給）量と自給率の推移>

資料：林野庁資料